
魔法少女リリカルなのは ～ 転生者達の軌跡 ～

KuroKuro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～転生者達の軌跡～

【Nコード】

N2796Z

【作者名】

KuroKuro

【あらすじ】

突然、神のミスによって人生を終わらされてしまったが、神からの謝罪ということで能力を貰い転生することになった主人公。転生先はリリカルなのはの世界。だが……そこは平行世界の一つで、イレギュラーも多々存在し下手をすれば二度目の死も有り得るという果たして、転生者達は物語を無事進めることができるのか？ 注意、作者は未熟でミスが目立つ可能性あり。・転生、チート、オリジナル要素、オリジナル技、原作ブレイクまたは改変が多くなる予定です。苦手な方はUターンをオススメします。・おかしい点、誤字が

ありがとうございました。指摘お願いします。

プロローグ（前書き）

はじめまして、Kurukuroと申します。

お楽しみいただけたらうれしいです。

ではプロローグどうぞ

ブローグ

「……ここは…一体？」

気が付くと僕は真つ白な空間にいた。

周りには椅子や棚のようなものもなく、空と地面の感覚も曖昧になるぐらい、どこまでも白い空間。

ここに来る前の出来事を思い出そうとするが

「何も思い出せない……」

記憶に霽がかかった様に全く思い出せない。

「やっと起きたか。やれやれ、待ちくたびれたよ」

自分ではない誰かの声が聞こえた。

僕は警戒しながら後ろに振り向いた。

そこには20代ほどの緑色の髪に、紫色の瞳をした人物が居た。
その容姿は

「リボンス・アルマーク……？」

ガンダム00のキャラクターの一人にそっくり……いや、生き写しと
言っていていいほどだ。

「まあそう警戒するな。この顔は似せているだけだ」

『似せている』どついうことだ？

「我々『神』は自由に顔を変えられる。そついうことだ」

……は？

いま……なんて。

「いま……神つて……」

「ん？ ……ああ、自己紹介がまだだったな。すでに言ったと思うが、神だ。短い間だがよろしくな」

……

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

…… ありえない。

「ありえないね、神など存在しない。ふざけるのは大概にしろ」

「まあ信じられないのも分かる。じゃあ証拠を見せよう」

…… 証拠？

神（仮）が僕に向けて指を鳴らした。

その瞬間、頭に何かが流れ込んできた。

『そこの子！ 危ない！！？』

キイイイイイイイイイ！！

これは………！

「 思い出したかい？」

「はぁ………はぁ………」

流れ込んできたのは、僕が子供をかばってトラックに轢かれた映像だった。

「僕は………死んでいる………！」

「そうだ。申し訳ないがこちらのミスで、あの事故で奇跡的に生還する筈だった君を殺してしまったんだ」

「そう………だったのか………」

「おや？ 意外と落ち着いているな。過去に同じような境遇の者たちが居たが、皆少なからず取り乱していたぞ？」

「十分驚いているよ。神がいた事にもね」

「そうか……。まあいい、賢い君ならここに呼ばれた意味、わかるかい？」

「何らかチャンス……でしょう？」

「正解」

口笛を吹きながら僕を指差す神。その姿はまるで遊び人のようだ。

「君を別の世界に転生させようと思ってね」

「転生。ネットの二次創作でよくある設定の……あれですか？」
ファンフィクション

「いろいろと違うが、まあその通りだ」

本当にあったとは……

「まずは転生に関する説明しておこう」

・
・
・
・
・
・

説明の内容を分かりやすく言つと……

- ・ 転生する先はリリカルなのはの世界。
- ・ 別の世界の能力を一つ、その世界の必需品を与えられ転生する。
- ・ 送られる世界は完全に独立した平行世界の一つ。（他にも無数の世界がある）
- ・ 原作には存在しないイレギュラーが存在する。
- ・ もしその世界で二度目の死を迎えると、完全に消滅する。

こんなところだ。

「それでは、君が欲しい魔力と能力を教えてください。」

「……じゃあ、魔力はA Aクラス。能力は仮面ライダーWの地球の本棚の次元世界版。ガイアメモリ関係の能力。変身するためのドライバーはデバイスに組み込む。……と、これぐらいです」

「魔力はA Aでいいのかい？ 大抵の人間は主人公達と同じか、Sランク以上だが……」

「これで十分です。」

「まあ君が決めることだからね。では、デバイスの方は……？」

「そうですね。インテリジェントデバイスで、待機形態は宝石の付いたブレスレットでお願いします。……そういえば、転生したら名前は好きに変えていいですか？」

「かまわないよ、特に問題は無いしね。要望は以上だね？」

「はい」

「これで転生する準備は整った。では君をどこかの次元世界へ送る、
それでは……御機嫌よう」

パチンッ！ と指を鳴らすと僕の意識は途切れた。

プロローグ（後書き）

転生系お決まりのようなプロローグでした。

神の顔がリボンスなのは、作者の趣味です。

次回から本編です。

EP1 転生/違法研究所（前書き）

いきなりの本編の2話連続更新です。

ストック？ ははは……ヤバいです。

そんなことは気にせず、本編をお楽しみください。

EP 1 転生／違法研究所

「……ここは…」

目覚めるとそこは、西部劇に出できそうな荒野だった。

そして、体に違和感を覚えポケットの中にあった鏡で自分の姿をよく見ると……

「若返ってる……」

外見年齢が10歳前後に変化していた。

おそらく神の仕業なのだろう。主人公の年齢に合わせるために……

「お目覚めになりましたか？」

「っ、誰だ？」

突然どこからか男の声が聞こえてき。だが周りには誰もいない。

「あなたの右腕です」

「右腕……？」

言われた通り右腕を見ると、そこには緑色の宝石が飾り付けられたブレスレットがあった。

「まさか……君が僕のデバイス？」

「はい。始めまして、ユグドラシルと申します」

「そう、よろしく。ところで、ここが何処だか分かる？」

「データ上では無人世界ですが、ここからそう遠く離れていない場所に生体反応があります」

無人世界のはずのここに人が居る……？

「……よし。行ってみよう」

「賛同しかねます。あなたは転生してまだ一時間と経っていない、迂闊です」

「確かにね、でも情報収集は必要だろう？」

確かに転生して一時間も経っていないけど、何もせず動かない方が何も始まらない。

「……わかりました。危険とあらばお呼びください」

神特製なのか、とんでもなく優秀なデバイスだ……

数分後、ユグドラシルの補助を受けながらも魔法を駆使し生体反応の出た場所へ来た。

「……」

「どうやら研究所のようですね。それとても、危ない方の……」

着いたのは、岩肌に上手くカモフラージュされた研究施設らしき場所だった。

入り口らしき場所にはライフル銃を持った警備員がいる。

施設自体は少し古そうだが使われている技術は外から見ても高い、それで質量兵器を警備が使っている。

明らかに違法施設だ。

「さてマスター、いかがなさいますか？お話は聞けそうにありませんよ？」

「そうだね、じゃあ様子見だ。何か使える物は？」

「メモリガジェットがありますが」

「よし。バットショットを出して、まずは警備から眠らせる」

「了解です」

ブレスレットの宝石の部分から光が放たれ、カメラモードのバットショットとギジメモリが出現した。

『バット！』

バットショット本体にギジメモリを挿入し、ライブモードを起動させた。

「よし。いけ」

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

施設内、廊下・・・

バットショットで攪乱し警備を気絶せた後、施設に侵入した。

通路にはカプセルがに並びその中には、培養液が満たされており、生物の肉片のようなものが浮かんでいる。

「趣味が悪いな、吐き気がする……」

「同感です」

気を紛らわす為に能力に関する説明を受けているうちに、かなり堅そうな扉の前にたどり着いた。

「マスター、この向こうから三名ほどの反応がします。少々変わった反応もありますが……」

「変わった反応は気になるけど……開けてみれば分かる。ユグドラシル、セットアップ！」

「Stand by lady Set up バリアジャケット、イメージから構築します」

足元にミットともベルカとも違う魔方陣 ミュージアムの紋章が展開された。同時にアルファベットが混じった緑色の魔力の光

に包まれ、それが晴れると黒を基調としたバリアジャケット　ロ
ングコートに下はアンダーウェア、革製のOFFG、オープンフィンガーグローブ編み上げブーツ
を纏っていた。

「ドライバーセレクト」

「バージョンVerロスト、スタンバイ」

そう命令すると右手首からユグドラシルが消え、腹部にベルト
ロストドライバー　が出現した。

「ジョーカーメモリを……」

「了解。ジョーカー、開放」

右手の中で紫の光が一瞬輝き、手の中にジョーカーメモリが召喚さ
れていた。

『ジョーカー！』

「変身！」

メモリをドライバーのスロットに挿し込み、そのまま右に展開した。

『ジョーカー！！』

再度、ガイアウィスパーが響き、僕の体は漆黒の鎧を纏った。

ロストドライバーとジョーカーメモリで変身する『バージョンロス

ト・ジョーカー』だ。

「はあああああ!!」

目の前の壁を思いつきり殴りつけた。

普通なら痛みに悶える羽目になるが、ジョーカーメモリと魔力によって強化された身体能力の前では、ベニヤ板同然に砕け散った。

遠慮無く部屋の中へ入ると最初に目に入ったのは……

十字架のよう物に縛られている13歳くらいの少女。

床に倒れ伏せ全く動かない少女と同年くらいの少年。

白衣を着た、2〜30代の研究員

「何だ！ 貴様は!?!」

「侵入者か!?! 憲兵を呼べ!!」

白衣の男たちがそう叫ぶ。だが、そんなことは関係ない。

一気に白衣の男たちとの距離を詰めて、鳩尾に一撃ずつ入れ、気絶

させた。

その男たちをその場に寝かせると、倒れている少年に駆け寄った。

「君！しっかりして！」

呼びかけても反応が無い。脈を調べてみるが……………

「手遅れか…………！」

せめてもと少年の遺体を楽な姿勢にしてやってから、十字架に貼り付けられている少女に向き直った。

そして改めてその姿を見る。

長い間縛られて所為で乱れてしまっている蒼銀色の髪。

色白の一系纏わぬ体には汚れが幾つもあり。長い間ここに縛られていたことが窺える。

「マスター、彼女は人間ではありません」

「？ それは一体」

「説明はあとです。お客さんお待ちですよ」

お客さん……？

入り口を見ると、質量兵器で武装している憲兵たちに囲まれていた。

「侵入者！ お前は完全に包囲されている！ 大人しく出て来い！
！」

「はあゝ。なんともテンプレートな台詞」

「そんなことよりも指示を」

「分かってるよ。まずはオハナシを聞いてからね」

そう言いつつ、憲兵達の前に出る。すると、白衣を着て武装した男が

「さて侵入者君。大人しく捕縛されて実験材料になるか。ここで汚らしい肉片になるか。好きなほうを選びたまえ」

ニヒヒヒ……と気持ち悪い笑みを浮かべながら呼びかけてくる。

「悪いけど、犯罪者の言い成りになるつもりは無い。後ろの子を開放してもらおうか」

「アハハハハハハハ！」

「ガキ一人が大口叩いてんじゃねーよ！」
「ここから生きて出られると思うな！」

……返ってきたのは、聞くに堪えない三流な台詞だった。

どうやら、話し合いは無理そうか……

「そうか……なら、遠慮なく行かせてもらっよ」

「ふん。全員撃てええええ！！！」

バラバラバラバラ！！

周りの憲兵たちが一斉に持っていたサブマシンガンを発砲してきた。

「シールド！」

「アーマープラス」

すると、アーマーが淡い紫色に輝き、向かってくる銃弾を弾いた。

そして、銃撃が止んだ隙に一気に距離を詰め徒手格闘で一人一人、確実に気絶させていく。

「次はこっちだ」

『ルナ!』

素早く、ロストドライバーのジョーカーをルナにメモリチェンジ。

『ルナ!』

全身のアーマーが黒から黄色に変化。『バージョンロスト・ルナ』にチェンジした。

「ドンドン行かせてもらおう!」

ルナ能力により腕を鞭のように変化させ、横薙ぎに攻撃。

壁に叩き付けられたり、頭をぶつけ合ったりして気絶。殆どの敵が床に倒れ伏せた。

「そろそろ終らせよう」

『ヒート!』

ルナと同じ手順でメモリを変える。

『ヒート!』

するとアーマーが黄色から赤色に変化。『バージョンロスト・ヒート』にチェンジした。

そしてメモリをドライバーのスロットから抜き取り、ベルトの右腰に設置されているマキシマムスロットに挿し込んだ。

『ヒート！ マキシマムドライブ！！』

全身から炎を発し、その炎を右腕に集中させる。

「……ヒート・ブレイズ」

そして集中させた炎がだんだん膨れ上がっていき

「ボンバー！！」

ドオオオオオオオオオオ！！

まさに爆弾^{ボンバー}のように爆発した。

同地点。数分後・・・

「まったく、何を考えているんですか。あんな密閉空間であのサイズの炎を爆発させたらこうなる事は予想できたでしょう」

「相手の意表を突く方がやりやすかったから……つい。でも、ちゃんと後ろにはシールド張ったよ?」

「それで何とか助かりましたけど、以後、気を付けてください」

「わかってる。で、この状況、どうしようか……?」

目の前に広がっている散乱した瓦礫や大破した機械。ブレイズボンバーでメチャクチャになった部屋の惨状をどうするか……

「それはスルーしてもいいでしょう。それよりも、当初の目的である情報収集をしましょう」

「……そうだね」

とりあえず、部屋は放置することにした……

・ ・ ・ ・ ・

「とりあえず無事だった端末から分かった事をまとめましょう。

- ・ここは人が住んでいない無人世界。当然、管理局の目も及ばない。
- ・ここで研究されていたのはユニゾンデバイス、古代の王たちの特殊スキルなどの古代ベル力関連。

- ・そしてこの背景には管理局のような巨大な組織らしき存在があること。

と、このくらいですね」

ユグドラシルの言葉を聞きながら十字架に貼り付けられていた少女を見る。

その辺りに落ちていた貫頭衣を着せているが、それだけでは寒いだろうとバリアジャケットのコートを掛けてある。

だが、数分前の騒動から一向に目を覚まさない。さすがに少し心配になってきた。

「じゃあ……この子はユニゾンデバイス……？」

「そうですね。この少女は資料上によると、古代ベルカ時代から存在していた本物の融合機のようにです」

たしか原作だと融合機は貴重だと言われていた。

偽者と本物がどう違うのか分からないけど研究者にとっては『貴重なサンプル』なのだろう。

嫌な話だ……

「……………ふみゆ……………」

そんなことを話していると今まで眠っていた少女が目覚めた。

そして僕を見て、それから警戒したように周りを見渡した。

警戒して当然か、ずっとここに監禁されていたんだから。

「安心して。僕は研究員じゃない」

すると少し安信　それでもまだ警戒している　したみたいだ。

「じゃあ……あなたは誰？」

初めて彼女の方から話しかけてきた。

そういえば、名前……。

正直、前世での名前は少し抵抗がある。

嫌いなあの人達に付けられた名前だから……

「そうだね……」

少し悩んでいると、転生する前の神の言葉を思い出した。

『そういえば、転生したら名前は好きに変えていいですか？』

『かまわないよ、特に問題は無いしね。』

改めて少女に向き直った。

「僕の名前は、園咲……園咲来人だ」

それが、この世界での名前になった。

EP2 風の少女／ユニゾン

「僕は、園咲……園咲来人だ」

僕は、ユニゾンデバイスの少女にこの世界での名前を名乗っていた。

「私の名前は……」

ヴウウウウー！！　ヴウウウウー！！　ヴウウウウウー！！

少女が名乗り返そうとしたとき、施設のブザーが鳴り響いた。

「！？　なんだ」

熱で^{ひっさ}上げた入り口の方を見ると

「なんだ……あれは？」

瓦礫の中から吹き飛ばされた憲兵たち、そして死んでいたはずの少年がまるでゾンビのように起き上がってきた。

その全員が虚ろな目をし、焦げて服から露出した肌からは赤い鎧のようなものが見えていた。

そして彼らが一斉に変貌し、ボロボロの服が脱げ落ちた。

「な！？ こいつらは……！！！」

憲兵たちが変貌した姿、それはヤモリを彷彿させる姿をした赤い『怪人』。

「レッドミニオン……！！」

「ゲルニユートではないんですか？」

「どっちも同じだけど、なんでこいつらが……！！？」

「ともかく、考えるのは後です。」

「みたいだね」

ミニオンたちは背中から十字型の大型ブーメランを生成し、襲い掛かってくる。

「ごめん、少し後ろに隠れてて」

素早く少女を機械の陰に避難させる。

「え？ ……あ、あの」

「大丈夫。すぐに終わらせるから」

安心させるように、彼女に微笑みかける。そして改めてレッドミニアオンたちに向き直る。

「ユグドラシル、バージョンverダブル」

「ダブルドライバー、展開」

腹部にダブルドライバーが展開される。そして同時に出現させておいたサイクロンメモリとジョーカーメモリを起動させる。

『サイクロン！』『ジョーカー！』

サイクロンを右スロットに、ジョーカーを左スロットに同時に差し込み、そこからバツクル部分を展開した。

「変身！」

『サイクロン！！ ジョーカー！！』

軽快なメロディーと共に体が風に包まれ、左右非対色の鎧を纏った。

バージョンロスト時と同様に赤い複眼、銀色の触覚に、右側 ソウルサイド は緑色、左 ボディーサイド は黒。中央のシルバースライン セントラルパーテーション によって左右に分けられ、右側の首の後ろには銀色のマフラーが^{なび}靡く。

ダブルドライバーで変身する基本形態『バージョンダブル・サイクロンジョーカー』だ。

「ソウルサイドは私が担当します。思いっきり行って下さい」

「わかった」

両腕に風を纏わせて、ミニオンたちへと向かっていった。

S i d e 少女・・・

「はああ！　でりゃあああ！！」

彼、園咲来人が半分この色をした鎧を纏ってあの赤い怪物と戦っているのを見ていた。

あたしはある場所で眠っていたが、突然目覚めさせられて長い間この場所に縛られていた。

そして毎日、いろいろな実験に付き合わされたり、目の前で人が改造されるのを見せられていた。

優しくしてくれたマスターや、仲間たちはもう居ない。みんなあたしを置いて逝ってしまった。

あたしに向けられた優しい笑顔は彼が久しぶりだった。

でも、なんで出会ったばかりのあたしの為に彼は戦っているの？

「おおおおおおおつ！！」

『でやあああああつ！！』

そう思っているとき、彼の戦っている姿が一瞬、マスターに見えた。

ああ、そうだ似ているんだ。雰囲気や、あの笑顔も。

『たとえ些細なことでも行動しないよりはいい。覚えておきなさい、ファイア』

そうだよね、マスター……

あたしも、せめて出来ることを……！

S i d e 来人・・・

「クソ、数が多い……！」

うじゃうじゃと無限に出てくる。全く、どこから出て来るんだ？

そんなことを思いながら、出て来るミニオンたちを倒していたが、さすがにキツくなって来た。

一対複数は、流石に分が悪い。どうする……

「ファングメモリを使いましょう。出し惜しみしていたらやられま
す」

「けど、アレには暴走のリスクが……」

「私が制御するので大丈夫です。だから早く！」

近づいてきた一体のミニオンを蹴り飛ばし、ファングメモリを出そ
うとするが

近づいてきたミニオンたちが風に吹き飛ばされたのを見て中断
する。

突然のことに呆然としていると

「……大丈夫？」

近づいてきたのは、あのユニゾンデバイスの少女だった。

まさか今の風も、彼女が……？

「危ないから下がって。ここは僕が」

「でも、苦戦してたみたいだけど？」

い、痛いところを突いてくるな、この子……

彼女はそのまま近づいてきて僕の手を握って

「だから、私の力を使って」

何かを覚悟した目でそう告げて来た。

「君の……力……？」

コクリ、と静かに頷く。

「でも、その力はとっても強い。中途半端な覚悟じゃあ飲み込まれる」

その言葉には強い意志と思いのような物が感じられた。

「それでも、いい？」

答えは決まっている。けど、

「なんで、僕に力を貸してくれるの？」

少し前にはまるで信用されてなかったのに……なんで？

「あなたは、私を助けてくれた。それだけで十分だよ」

彼女は華やかな笑顔を向けながら、僕に言った。

「わかった。けど、一つだけ聞かせて」

「なに？」

「君の名前、まだ聞いてない。教えてくれる？」

握った手を握り返しながら聞いた。

「フィア。フリーフィア・フェニクス」

少女、フィアは微笑みながら名乗った。

フィアの放った風に飛ばされたミニオンたちが立ち上がり、またこ

ちらに襲い掛かってくる。

「その鎧を解除して。それだとユニゾンできない」

言われた通りに変身を解除し、フィアと向き合って手を握る。

「心を落ち着かせて……いくよ」

「ああ」

僕らの足元にフィアの魔力光と思われる色をした淡い緑色のベルカ式の魔方阵が展開された。

「「ユニゾン・イン!!」」

魔方阵と同じ色の風が僕らを包み込み、僕の体に変化を起こした。

フィアに貸していたロングコートが元に戻り、髪の色が茶色からフィアと同じ蒼銀色に変化し、瞳も左が赤紫色、カメラ右だけは元から緑色だったハイライトにDNAのような螺旋記号が浮かび上がった。

そして背中には魔力で出来た鳥のような淡い緑色の翼が出現した。

右手には巨大な槍。全体は淡い緑色で同じ色の孔雀石のようなものが飾り付けられていた。

全長は1.5メートルほどあり巨大だが、全く重みを感じない。羽のように軽い。

「すごい……！　これが、ユニゾン……！」

疲れがまるで無かったかのように体が軽い、これなら行ける。

「一網打尽にするよ」

『うん！』

足元にベルカ式魔方阵が展開し、風が渦巻きながら槍に集まってくる。

『放て、天風！』^{てんぱう}　「ヘヴンス・ストーム……！」

周りを囲んでいたミニオンたちに放った『風』が襲い掛かった。

その風は一瞬でミニオンたちを消し去り、施設を吹き飛ばした。

風が収まるとそこは嵐が過ぎ去ったあとなようになっていた。施設は完全に崩壊し瓦礫の山と化した。

「うわぁ……。すごいな……」

『えへへへ。ありがとう』

今は僕の中にいるフィアは照れ臭そうに笑っていた。

「『ユニゾン・アウト』」

ユニゾンした時と同じように風に包まれ、僕とフィアは分離し、僕の髪と瞳が元に戻った。

それと同時に疲れがドツと襲い掛かってきた。初めてユニゾンしたんだ、その影響なのだろう。

「大丈夫……？」

「ああ、慣れない事をしたから疲れたんだと思う。大丈夫」

「そっか」

安心したようにフィアは胸を撫で下ろした。

瓦礫に腰掛けて休んでいると、ふと思い出した。

「そっいえば、君はこれからどうするの？」

この施設から開放されたとはいえ、他に行く当てが無いだろう。

「うーん……来人に付いて行きたい！」

「え……？」

なんでそうなるの？

「理由を聞いていいかな？」

「えーっと、来人と一緒に居たいからじゃあ……ダメ？」

小首を傾げて、無垢な瞳でそう告げてくる。

その目には変な思惑は無く、ただ純粹に言葉通りの意味が感じ取れた。

「いいよ。僕も困らないしね」

そう言ったらフィアはとても綺麗な笑顔を浮かべた。

「ありがとう！」

「どういたしまして。これからよろしくね、フィア」

こうして僕らは出会った。

後に、掛け替えの無い大切な相棒になる少女に。

EP2 風の少女／ユニゾン（後書き）

はじめから伏線が多く入りました。（回収できるのかなコレ）

・ユニゾンデバイスの少女フィア。この子を登場させた理由は来人のパートナーが欲しかったからです。

最近のライダーはパートナーが居ることが多いからでもあります。

・レッドミニオン登場。一応複線です。明かされるのを楽しみにしててください

EP3 ちょっとした寄り道／新しい謎（前書き）

最近、ちよつと風邪気味です。

皆さんも風邪にはご注意を。

雑談はここまでにして、本編連続投稿をお楽しみください

EP3 ちょっとした寄り道／新しい謎

『衣食住』

それは人間が生きる為に最低限必要なものだ。

僕ら、園咲来人とフィアは旅の最中だから住居は必要ない。食事は川などで魚などを取れば問題ない。

だが衣類は……………？

「……………マズイよねえ」

僕、園咲来人は溜息をついた。理由？ それは上記参照。

「なにがマズイの？」

そう無邪気そうに問い掛けてくるのはフィア。転生した最初の日、とある研究所から助け出したユニゾンデバイスの少女だ。

「なにつて、君の服だよ。それで寒くないの？」

「うーん、そういえば……ちょっと寒いかも」

いやずっと貫頭衣のままっていうのはどうかと思うんだけど……

あの研究所からフィアを助けてから約半月。

フィアから研究所のことを聞いたが、毎日悲鳴が聞こえていた以外何も知らないらしい。

結局、なんであの場にレッドミニオンが大量にいたのかは分からず仕舞いだ。

まあそれはいい。今は新たな問題が浮上した。

フィアの服だ。

ユグドラシルが神より僕の荷物（元の世界で使っていたものだが今の体に合わせてある）を預かっていた。

- ・予備の衣類数着
- ・ミッドチルダを中心とした管理世界の通貨＋とんでもない額の通帳
- ・日本の金銭＋同じくとんでもない桁の通帳

という中身だ。

だが当然のことながらフィアの服は無い。

というわけで、とある管理世界に足を運んで、備品調達することになった。

第23管理世界、ルヴェラ・・・

田舎町のような豊かな自然が残っている穏やかな世界。それがここ、ルヴェエラだ。

「服買うためにここに立ち寄ったの？」

「そうだよ。いつまでもその格好って訳にもいかないしね」

「その格好ですと目立ちますから。……悪い意味で」

「むううゝゝ！」

僕とユグドラシルの言葉に拗ねたようにむくれるフィア。

でも実際、目立つのだから仕方ない。出来るだけ早く着替えてもらわないと。

「じゃあ、お金を渡すから自分で気に入った服でも買ってください」

「一緒じゃないの？」

突然、フィアが寂しそうな声を出す。ひょっとして一人で買いに行けないのかな？

まあ、長い間外の世界とは無縁だったようだし不思議ではないけど

……

するとユグドラシルが念話で話しかけてきた。

「（マスター、ファイア様は長い間縛られていたんです。一人になるのは怖いでしょう）」

……そうだった。ファイアはずっと一人だったんだ。ずっとあんな場所に何年もいたんだ。

また独りになるのは恐ろしいんだろう。

「わかった。僕が買ってくるよ」

こんなことやった経験無いけど、頑張ってみるか。

・ ・ ・ ・ ・

手早く済ます為に、僕が変身魔法で15〜6歳に変身して近くの被服店で、細かいサイズが左右されないワンピース数着、サンダルなどの靴、あと……下着を購入。

頑張るとは言ったものの、非常に気まずかった。店員が「コレをどうされるんですか？」と聞いてきたら、「妹のです」と答えてやり過ごした。

周りの客達の視線も恐ろしかったし……これならまだミニオンたちとの戦いの方がやりやすかった。

そして

「えへへへ 似合っ？」

「……ああ、似合ってる」

さっきのことを思い出してへこんでいる僕を他所に、フィアが僕を買って来たワンピースを着て僕に見せる。

まるで小さなファッションショーだ。

言葉通りに似合ってるしフィアも喜んでくれている様で何よりだ。

ちょうどその時だった。

キユイイイイイイイツ!!

「っ!?!? これは……!?!?」

「へ? 結界……!?!?」

突然のことで僕らは混乱した。

平和な世界で突然結界に閉じ込められたのだ。そして、周りには「僕ら以外誰もいなくなっていた」………。

つまり

「狙われてるのは、僕らか……」

心当たりが無い訳ではない。少し前に研究所破壊をやったんだから

……

けど、残留反応から場所を割り出したとしても早すぎる……!

そう思っている間に、周りには『敵』に囲まれていた。

『敵』はこの間のレッドミニオンではなかった。

それは人型ではあるがミイラのように全身が包帯で包まれている、頭からは赤く光る目のようなものが包帯の隙間から見えていた。

その姿からして明らかに人間じゃない。

「フィア、後ろの隠れてて！」

「う、うん！」

フィアを後ろに避難させ、改めてそのミイラたちを見渡す。

「ユグドラシル、生体反応は？」

「感じられません。それ以前に、生物かどうかも怪しいです」

「……とりあえず倒す、しかないね。セットアップ、Verアクセ
ル」

「バリアジャケット、ドライバー展開」

一瞬でバリアジャケットを纏い、腹部にはバイクのハンドルを模したアクセルドライバーが展開されている。

『アクセル！』

「変身」

ブウウウウン！！

『アクセル！！』

赤い重厚な装甲、フルフェイスヘルメットを模した仮面、背中にはバイクのタイヤ。

アクセルドライバーとアクセルメモリで変身する『バージョンアクセル・アクセル』だ。

『エンジン！！』

アクセルメモリの専用武器『エンジンブレード』、そのスロットにエンジンメモリを差し込み構える。

「さっさと終らせよう」

「了解です」

戦闘はあっけなく終了した。

エンジンブレードで片っ端から切り裂いていたが、実体系の攻撃は効果的なダメージを与えられなかった。

それが分かった瞬間、ジェットの中距離攻撃とエレクトリックの電撃付加の斬撃で攻撃していったらあっという間に殲滅した。

倒されたミイラはミニオンと同じように跡形もなく消えて証拠は残らなかった。

結果、新しい謎が増えただけだった。

冷静に考えてみればおかしいところが幾つもある。

一番は、神が僕を転生させた理由は？

二次創作だと『暇つぶし』『ミスの隠蔽』そんな理由が多かったけど、正確には分からない。

一番近いのは『ミスの隠蔽』だけど、焦っていた素振りもないし……

いや、今考えてもしょうがない。今は出来ることをやる。

それだけだ。

「全く、休みが台無しだ」

「ライト、落ち込まないでよー！」

そりゃ落ち込むさ、せつかくの平穏な時間を邪魔させたんだ。むしろ、落ち込むなという方が無理。

気持ちを切り替えて

閑話休題

今日購入した物（主に服に食料）は全て、ユグドラシルの収納空間へ保存しておいた。

「もう、この世界に用はなさそうですね」

「だね、それじゃあ目的地へ行こうか」

「……そういえば、目的地って何処なの？」

そういえば、フィアにはまだ言っていなかったね。

「目的地は地球。そこに向かう最中だったんだよ」

最中、とはいいづらい。始まったばかりにフィアと遭遇したのだから。

「そっか、じゃあ急ごっか！」

「そっだね」

「転送シーケンススタート。目的地、第97管理外世界『地球』」

そして光に包まれ、僕らは転送されて行った。

E P E X 1 暗闇に潜む者たち

次元世界の海、次元空間。何処かの世界の同士の間にそれは在った。

全長はとてつもなく長く、まるで、S F 映画に出てきそうな要塞のような大きさ。

巨大な小惑星が何かで造られたそれには全体の約6割が機械のようなものが確認できる外見をしている。

明らかに、人工物だが、人が造ったかも怪しいこの建造物は次元空間 普通なら人間が立ち入れない場所 に船のように浮かんでいた。

だが、その建造物には人が住める空間があつた。それはまるで貴族が住んでいたような城、そしてその城下町のような光景だ。

コツ、コツ、コツ、コツ

大理石、それに酷似した何かで造られた床を誰かが歩く。

手袋、シャツ、燕尾服と黒一色の服装をしっかりと着こなした身長180以上の長身の優男だ。

唯一黒でない色は腰から覗く懐中時計のチェーンだけだ。そのチェーンを揺らしながらその男は歩く。

その手に持っているのはシルバーのティーセットだ。

やがて一つの巨大な扉の前にたどり着き、数回ノックする。

『待っていたよ、入っておいで』

声の主 自分の使える主 の了承を得て、扉を開け、部屋に入る。

部屋に入るとそこは広々とした空間だった。

一つのスペースにはフラスコやビーカーといった科学用品。

また別のスペースには黒染めにされた青銅像ブロンズが並べられていた。

そして部屋の中央には玉座があり、その近くにはティータイムを楽しむための専用のテーブルが置かれていた。

そして、そこから見て約6〜8メートルほど離れた壁には巨大なダートボードがあった。

「ほらほら、早くしてよ『グリム』。お茶が冷めちゃうだろう」

無邪気そうに執事の男 グリム に命じているのは肩から垂れ下がるほど長い黒髪を蓄え、黒く染められた白衣を着ている美形の

男だ。

「はい、少しお待ちください」

グリムはテーブルにティーセットを置き、手早く準備を始め、ほんの数秒で準備を終えた。

そして、美形の男が席に着き、熱いお茶が注がれたティーカップに口を付ける。

「ん〜、いつもながら最高。甘さといい熱さといい完璧だ」

「ありがとうございます」

褒められているが表情は変わらない。

これはいつもの事だ。彼が代理の体を手に入れてからいつも続いていること。

紅茶を飲み続けている男が、ふと思い出したように

「そういえば、何か報告したい事があったんじゃないかっただけ？」

「はい、先日、新たな『転生者』が確認されました」

「へえ」

ピタリと男が紅茶を飲むのを止め、カップをソーサーに置く。

「『上』の奴らも必死なんだねえ。確かこれで えつと……」

「七人目です」

「そうそう、七人。『前』と同じ人数だ。それで、どんな奴だったの？」

「はい。数日前、無人世界に設置してあった『ファクトリー』の1つが潰されました」

会話を続けながら、資料のようなものを渡す。

「へえ」。能力は仮面ライダーWか……多いねえ、この系の能力」
そう呟きながら、資料を読み続ける。

「ん？ 『施設に拘束していた融合機が強奪』……どういふこと、コレ？」

「はい。施設に拘束していた融合騎、フリーファイア・フェニクスが七人目に強奪されました。」

チッ

一瞬だけ仇敵を見るような顔を見ると、何かを考えるように人差し指でソーサーに置いたティーカップをつつく。

「へえ、『アイツ』の融合機をねえ……。施設を潰したのはそれが目的？」

「いえ、恐らく偶然かと。その後、管理世界のルヴェラにて彼らを発見。『マミーナイト』で実力を図りましたが、力に慣れていない者の動きでした」

「へえ、マミー使ったんだ……。ところで施設の責任者はどうしたの？」

「『始末』しておきました。前々から作業にも荒さが目立っておりましたので……」

上出来　と男は上機嫌に茶菓子をかじる。

「それで、彼の写真は撮ってある？」

「こちらに」

グリムが懐から取り出したのは、彼、園咲来人の写真。ルヴェラでミイラ　マミーナイト　たちと戦う寸前の写真だった。

「ん〜、いつもの事だけど、隠し撮りにしたら上々だね。貼っ
いて」

「かしこまりました」

そしてグリムが壁に掛けてあるダートボードへ歩き、そこに写真を
貼り付ける。

そのダートボードには他にもいくつか写真が貼り付けられていた。

オレンジ色の髪の少年が黒い和服を着て出刃包丁のような大刀を振
り下ろす写真

茶髪の少女が橙色の炎が燈された金属グローブで戦っている写真

黒髪紅眼の少年が二本の剣を振るい戦っている写真

白髪の少年が純白のマントを靡かせ左の鉤爪を振り下ろしている写真

そして、

アタッシュケースを持って歩く赤髪の少年の写真

騎士や龍などさまざまな生き物が描かれたカードを弄^{いじ}る少年の写真

だがこの二つには×印が付けられていた。

スタンツ！

男がダーツボードに矢を投げる。矢が命中したのは先程、グリムが貼り付けた来人の写真、その真ん中だ。

「ふっふふ。これから楽しくなりそうだ」

クスクスと楽しそうに笑う男。だが、その表情からは悪意が滲み出ていた。

「そうですね。『アバター』……」

スタンツ！

その部屋には楽しそうに笑う声と矢が刺さる音が響いていた。

E P E X 1 暗闇に潜む者たち（後書き）

今回も伏線だらけでした。回収の予定はA・S編になります。

これでプロローグ編は終了です。次回から無印編へ介入していきます。

ではまた次回！

キャラクター設定（随時追加予定） 最新更新日12月24日

園咲来人（そのざき らいと）

容姿モデル：『カードファイト!! ヴァンガード』雀ヶ森レン

性別：男

髪：茶色

長さ：肩に掛かるぐらい

瞳の色：緑色（エメラルドに近い）

好きなこと：読書、静かな時間、運動

嫌いなこと：命を粗末にする行動（人物）、権力者、平穏な時間を邪魔されること、実の親

魔力資質：AAランク

魔力光：細かくアルファベットが混じった緑色

転生で得た能力：『仮面ライダーW』ガイアメモリ、次元の本棚^{ほし}

イメージSV 阿部敦

『とある魔術の禁書目録』上条当麻

『カードファイト!! ヴァンガード』 雀ヶ森レン

詳細

メイン主人公。性格はとても大人びていて、年上の人間にも動じず常に冷静。

基本的には温厚な性格で大抵は丁寧口調だが、怒ったり焦ったりしたときは口調が荒くなる。

頭脳、理解力、特殊技能、身体能力などがとてつもなく高く、前世から『天才』と呼ばれていた。（本人はこの呼び方を嫌っている）
実の両親に対しては憎しみにも似たような感情を抱いているが理由は不明。

『目の前で誰かが死ぬ』ことを嫌っており、他人を助ける為なら自分を犠牲にする傾向がある。

ユニゾン時には右目の瞳が変化せず、DNAのような螺旋記号が瞳に浮かび上がる（理由は不明）

能力説明

・次元の本棚^{ほし}は、原作の地球の本棚の次元世界バージョンだが、キーワードが揃っていないければ対象を絞り込むことが出来なかったり、『鍵』が掛かっていて閲覧出来なかったりする。

・ガイアメモリはそれぞれ独立した魔力を持っている。

・大抵はB、ゴールドメモリはAAA、変身に使用するメモリはA

A、特定の数本がS

・メモリには意識に似たようなものがあり使う人間を選び、相応しくないと思えば、拒絶する。その中でもゴルドメモリは完全な自我を持っており、ドーパント化し独立行動が可能（命令に必ず従うとは限らない）

・T2メモリとT1メモリは同時使用できず、どちらかを封印しなければならぬ。

・T2メモリはすべてが自我を持っており、最大五体まで同時にドーパント化させておくことが可能。

・来人以外メモリは使用できない。

デバイス

名前：ユグドラシル

待機形態：緑色の宝石の付いたブレスレット

バリアジャケット：黒を基調としたロングコート、その下はアンダーウェア、革製のオープンフィンガーグローブOFFG、編み上げブーツ

基本人格：礼儀正しく、主に対してもはっきり意見できる性格。

基本能力：バリアジャケット展開、物質収納

ドライバーについて

ロストドライバー：「Verロスト」のコール（基本であって必ず

宣言する必要は無い）で出現させる。一本のメモリで変身し、他に比べると戦闘スペックは劣るが一本のメモリの能力を純粹に発揮できるため汎用性が高い。使用するメモリによってスペックが変化する。

ダブルドライバー：コールは「Verダブル」。二本のメモリで変身し、ボディーサイド、ソウルサイドの二本の調和により平均スペックはAAA（メモリの相性によってプラス、マイナスが付く）フアングジョーカー、ウイングジョーカー（オリジナル）サイクロンアクセル（オリジナル）でAAA+、エクストリーム系でSS。使用できるメモリはソウルサイドが五本、ボディーサイドが四本（エクストリームは除く）

アクセルドライバー：コールは「Verアクセル」。ロストドライバー同様に一本のメモリで変身するスタイルだがこちらは特定のメモリの能力を最大限発揮するタイプ。使用できるメモリはアクセル、トライアルのみで汎用性は低いが平均スペックはAAA+。あまり使用する機会は少ない。

フリーファイア・フェニクス（ファイア）

容姿モデル：『シーキューブ』ファイア

性別：女

髪：蒼銀色

長さ：腰辺りまでのロングヘア

瞳の色：赤紫

好きなこと：来人、甘いもの、愛玩動物、風、先代マスターと仲間達
嫌いなこと：独り、研究者、大切な人が傷つけられること

魔力資質：A A A ランク

魔力光：淡い緑

バリアジャケット：淡い緑のラインが入った厚めのジャケット、その下は紺のインナー、下はショートパンツにニーソックス、その上からロングブーツ。

イメージS V 井口裕香

『とある魔術の禁書目録』インデックス

『僕は友達が少ない』高山マリア

詳細

とある無人世界に建てられていた研究所に捕らわれていたユニゾンデバイスの少女。

性格は明るく好奇心旺盛。しっかりした面もある。長い間捕らわれていたせいか、独りになることを極端に怖がっている。

レプリカではない古代ベルカ時代からの融合機の生き残りで古代ベルカ式の風を利用した特別な魔法を駆使する。

ユニゾンデバイスであるため体のサイズは任意で変更でき、デフォルトサイズ（中学3年ほど）とミニマムサイズ（約30センチ）が基本となる。

『フェニクス』というファミリーネームは先代マスターのもので自分のものではない。

ユニゾンした相手は髪と瞳の色が同じになり、専用武器『不死鳥の槍』が装備される。

衛宮レイジ（エミヤ）

容姿モデル：『Fate』ギルガメッシュ

性別：男

髪：黒色

長さ：うなじ辺りまで

瞳の色：赤み掛かったオレンジ

好きなこと：運動、静かな所、剣、神話

嫌いなこと：無駄に偉そうな奴、知り合いが傷つけられること

魔力資質：Sランク

魔力光：鋼色

転生で得た能力：『Fate』衛宮士郎の投影魔術。アンリミテッドフレイドワークス
王の財宝ゲイトオブバビロン無限の剣製、

イメージSV間島淳司

『緋弾のARIA』遠山キンジ
『ぬらりひよんの孫』鴉天狗

詳細

フェイト側に付く転生者。転生に対しては否定的だったが神に「転生しないなら天国に送る」と言われ、仕方なく応じる。

転生した人生は悪くは無いと思っているが、転生に対して疑問を抱いている。

前世では実家が道場をやっていた事もあってか剣の腕は高く、あらゆる剣を使いこなす。

名前は、苗字は変えているが、下の名前は変えていない。（基本力タカナで表記）

能力説明

- ・ 投影魔術を魔法に置き換えたもので、基本的には特に変わらない。
- ・ 投影する物を把握していなければ、強度や精度に影響することがある。
- ・ 普段はデバイスがサポートしているがその気になればサポート無しで投影できる。
- ・ ゲートオブバビロンは展開範囲を広げるほど魔力消費が大きくなり、制御にも神経を集中する。（無印編現在では約四畳ほどが限界）

デバイス

名前：ブレイド

待機形態：東洋剣型のネックレス

バリアジャケット：ステイナイトでギルガメッシュが着ていた服装、両腕に金属製の籠手、ブーツ

基本人格：非人格型デバイスと思われるほど無口

基本能力：バリアジャケット展開、物質収納、投影した剣の貯蔵、能力使用時のサポート

EP 4 地球到着／二人目の転生者（前書き）

最近の悩み。

- ・なのはGODが楽しすぎる！
- ・そのせいか、執筆が進まない。
- ・お気に入り登録が増えない。

です。

愚痴っぱいのでここまでにして本編どうぞ

EP 4 地球到着／二人目の転生者

目を開けるとそこは海沿いの公園。海沿いということもあって潮の匂いが鼻に入ってくる。

「ここが地球なの？」

「そう、ここが地球だ」

『帰ってきた』という気持ちになるが正直言って複雑だ。元^{前世}の世界でもないから住んでいた家も無いだろうし、この世界での思い出もない。

止めた。せっかく地球に来たんだ、これからのことを考えないと。

「ユグドラシル、今の正確な位置は？」

「海鳴公園の マスター、その前にお伝えしたいことが」

「なに？」

「付近に結界反応、内部ではロストログアと魔導師数名による戦闘が繰り広げられています」

ロストロギア……十中八九ジュエルシードだろう。

でも、誰が戦っているんだ？ 転生者か、なのはかフェイトの場合もある。

「とりあえず行ってみよう。じっとしていたら分からない」

「了解です。Set Up」

魔方阵が一瞬だけ足元に展開し、漆黒を基調としたバリアジャケットを纏った。

「Verダブル、スタンバイ」

あらかじめ、腹部にドライバーを出現させておく。
こうしておけば即座に変身し攻撃に対応できると同時に、相手に顔を見られずに済む。

「ファイア、君もジャケットを」

「えっと……騎士甲冑のこと？」

…そういえば、ベルカ式だとそう呼んでるんだっけ。

「そつだよ。早く展開して」

「分かった。」

目を閉じ僕と同じように一瞬だけ魔方阵が足元に展開し、魔力の光に包まれ服装が変わっていた。

魔力光と同じ淡い緑色のラインが入った厚めのジャケット、その下には紺のインナー、下はショートパンツにニーソックス、その上からロングブーツを履いている。

「えへへへ 似合うでしょう?」

似合ってると言いたいが、今は優先することがある。

「感想は後ほど、それじゃあ行くよ」

魔法で中に飛び上がり、結界が張られているという場所に向かう。

「ええ!? ちょっとまってよ!!」

少し遅れてフィアも付いて来る。

僕は追いついたのを確認して、スピードを上げた。

少し飛んで森に入ったところで結界を見つけ、すんなり通れたのでさつきから爆発が起こっている場所へ向かっている。

「ここです」

「派手にやってるね……」

視線の先には、ジュエルシードを取り込んで暴走したらしい爬虫類が暴れまわっていた。

それと戦っているのは、死神にも見えなくも無いような黒いバリアジャケットを着た金髪紅眼の少女　おそらくフェイト　とオレンジ色の体毛の狼　アルフ　。

そして二人（または、一人と一匹）と一緒に戦っているのは、

黒髪紅眼の少年だった。

彼の手にはFetaの英霊エミヤがよく使っていた剣、干将・莫耶

白黒の夫婦剣　　が握られている。

「得た能力は投影魔術、みたいだね」

もしかしたら王の財宝かもしれない。
ゲートオブバビロン

バリアジャケットはステイナイトでギルガメツシュが着ていた私服に似たものだが、両手を覆う金属の籠手が戦闘用であることを示している。

その剣捌きは、素人目に見ても強いことが分かる。

「正確な実力を知りたいけど、まずはジュエルシードを片付けないとね」

メモリを出現させ、起動させる。

『サイクロン！』 『トリガー！』

「変身！」

『サイクロン！！ トリガー！！』

機動性と拡散射撃に特化した。『バージョンダブル・サイクロントリガー』に変身した。

「さて、援護と行きますか。ファイア、サポートよろしくね」

「了解！」

トリガー専用武器『トリガーマグナム』を構え、参戦して行った。

俺は約一年前に神のミスで死んで、この世界に転生させられた男だ。
ちなみに、落下してきた鉄骨にペシャンコにされて死んだらしい。
なんともスプラッタな死に方をしたもんだ……

転生って話は最初の方は乗り気じゃなかったが、あの野郎。「拒否
ったら天国送りだよ」なんて言われたら転生するしか無いじゃね
えか……」つたく、今思い出してもムカつく。

まあでも、F e t aの投影魔術と王の財宝を得た第二の人生もそこ
まで悪くは無いと思っている。

ものにするには苦労したが

「ゲゲゲゲゲゲゲ！！」

「 黙れ、このトカゲ野郎！ ブローケン・ファンタズム 壊れた幻想！！！」

「ゲゲエエエエ！」

イカンイカン、戦闘中だったな。

転生して、そこからいろいろあって今はフェイトたちと行動を共にしている。

その時の話についてはまた今度ということだ。

しかし、フェイトたちの側に着けたのはラッキーだった。
うまくやればフェイトもプレシアも救える。もしかしたらアリシアも……

つと、今は戦闘だったな。

さっきブローケン・ファンタズムで砕けた、干将・莫耶をもう一度作り出す。

しかしこのトカゲ、何回潰しても脱皮(?)して復活しやがる。

まったく、どうやったら終わらせるんだか。

そんなことを考えていると

バラバラバラバラ!!

「ギイイイ!!」

いきなり、どこから拡散弾のようなビームが巨大トカゲを襲った。
弾丸が襲ってきた方向を見ると、俺の記憶が確かなら

「ダブル……?」

前世の仮面ライダーの一人がそこにいた。

しかし、身長はパツと見150ぐらい。しかも魔力を感じる。

明らかに俺以外の転生者だ。

援護したってことは少なくとも邪魔はしないってことだな。

とりあえず、フェイトとアルフに念話を飛ばす。

「（フェイト、アルフ、聞こえるか？）」

『うん、聞こえてるよ』

「（出てきたアイツ、どうする？）」

『ジュエルシードの横取りが目的かもしれないよ、さっさと倒しちまいなよ！』

「（落ち着けて。とりあえず、お前らは横取りされないように見張ってる）」

そう、フェイトとアルフに念話で伝えて切った。

仕方ねえ、信用出来るかどうかかわからねえけど、手伝ってもらうか。

その方が手っ取り早く済みそうだ。

S i d e 来入

「おい！ その奴！」

F a t eの転生者がこちらに近づきながらそう叫びかけてくる。

「お前が誰だ知らねえが、目的は同じだろう。とりあえず手伝え！」

はあ……………よかつた！ 単細胞じゃなくて。無駄な争いは御免被りたい。

「いいよ」

そう返事をし、F a t eの転生者の元に飛ぶ。

「一応、名前を聞かせてくれる？」

「ああ、衛宮^{えみや}レイジだ。お前は？」

どうやら、こっちで使い始めた名前らしいね。僕と同じように

「……園咲、来人」

「オツケー、しっかりやれよ」

「了解」

僕らは同時にその場を飛び上がり、彼、衛宮レイジは干将・莫耶を投げつけ、僕はトリガー・マグナムを構える。

「ブローケン・ファンタズム！」

「サイクロンバレット！」

爆ぜた剣ツルギと風の弾丸が容赦なく暴走した爬虫類に降り注ぐ。

「グギヤアアアア！！」

そんな悲鳴と共に暴走態が倒れ、僕らは少し離れた場所に着地する。

「油断すんなよ、また復活するぞ」

「どつゆつこと？」

「何度ぶっ倒しても脱皮して復活してくんだよ。まったく、面倒臭
せえ」

脱皮………なるほど。ジュエルシードの影響で再生能力が高まっていて何度倒しても復活してくるのか。道理で手こずっている訳だ。そしてレイジが言った通りに脱皮し、トカゲの暴走態が傷一つ無い姿で起き上がった。

無限再生は確かに恐ろしい力だ。けど、仕組みさえ分ければ対処できる。

「（ファイア、聞こえる？）」「

『う、うん。聞こえるよ』

「（今はどこに？）」「

『えっと、トカゲの後にいるよ』

「（よし、どうにかしてアレの動きを止められる？）」「

『できるよ！』

「（じゃあお願い）」「

念話を切り、レイジに向き直る。

「誰と話してたんだ？」

「いいから、ちょっと足止め頼める？」

「？ べつに、いいけど」

「よろしくね」

「ギエエエエエエエエ！！」

話を終えた瞬間トカゲが襲い掛かってきた。

ちょうどいい、オトリの必要がなくなった一気に終わらせられる。

「ファイア！ 今だ！」

合図を送ると、トカゲの後ろの木からファイアが飛び上がってきた。

「ウィンディーバインド！」

トカゲに淡い緑色の風が纏わり付き、動きを止めた。

これがファイアの風を利用した魔法か。

面白い。けど、とりあえず考えるのは後だ

「やれ！衛宮レイジ！」

「命令すんな！！
トレス・オン 投影開始、デュランダル！」

文句を言いながらレイジが投影したのは、英雄ローランの持つ聖剣デュランダルだ。

「くたばれトカゲ！ 真名開放
デュランダル 不滅の刃
！！」

投影したデュランダルが、彼の魔力光らしい鋼色に輝き、トカゲに振り下ろされた。

「グゲエエエエエエエ！！？」

トカゲは真つ二つにはならなかったが、ザックリと痛々しい斬り傷が出来ていた。

「せめて……さっさと楽にしてやらないとね」

『シール！』

出現させたメモリ、封印能力を持つシールメモリをトリガーマグナムのスロットに差し込み、さらにバットショットを合体させる。

『シール！ マキシマムドライブ！！』

「シール・スナイピングショット……」

収束された風の弾丸がピンポイントにトカゲを暴走させていた
ジュエルシードに命中し、封印した。

封印されたジュエルシードは自動的に僕の手元に引き寄せられてきた。

「ジュエルシード、封印完了……」

けど、あまり良い気分はしなかった……

同地点、数分後・・・

トカゲの暴走態を鎮めてレイジがフェイトたちと合流し、ちょっとした話をする事になった。

だが、獣の姿のアルフが僕に唸って警戒し、フェイトも同じように（アルフほどではないが）警戒している。

話し合いというにはあまりにも刺々しい雰囲気だ。

とりあえず少しでも信用してもらっ為にも変身を解除する。

鎧が巻き起こった風に細かく分解され、変身が解除された。

「とりあえず、そっちのお嬢さんと使い魔さんは初めまして。園咲来人了」

「ライトの相棒のフィアです。よろしくね」

「あ、えっと……フェイト・テストロッサです。こっちはアルフ、私の使い魔です」

お互いに簡単な自己紹介の後、特に話す話題もないためかすぐさま本題に入った。

「あの……さっきのジュエルシードを渡してくれませんか？」

「NOと答えたら？」

「力ずくで奪います」

試しに聞いてみたら即答だった。僕が答えた瞬間、持っている戦斧せんぶのようなデバイス、バルディッシュを握りしめていた。

その眼からも覚悟のようものが感じ取れた。

「冗談さ。こっちとしては、ジュエルシードはこれどうでもいい、少しデータが欲しいだけだ」

「既にデータは取ってあるので、渡してしまっても問題ありません」

「
ということで、どうぞ」

ちょうど両手が塞がっていないレイジに投げ渡す。

「あ、ありがとうございます」

フェイトは律儀にお辞儀をして御礼を言ってきた。

「（んで、お前はこれからどうするんだ？）」

フェイトたちに聞こえないように細工をした念話でレイジが問いかけてくる。

「（そうだね……ここに来たばかりだから、動くのは情報を整理してからかな）」

一応、地球とはいえ、多少違う点があるはずだからその辺りも把握しておかないと後々大変な目に会つかもされない。

備えあれば憂い無しという事だ。

「（そうか……一応教えておくが、こっちはまだなのはたちと接触してねえ。もしかしたら、もう他のヤツ転生者が付いてるかもな）」

「（まあ、こっちは勝手にやるだけ。一応、教えてくれてありがとう）」

それで念話を終らせた。

「それじゃあ、僕たちはこれで。石集め、がんばってね」

「へいへい、じゃあな、見つけたら寄越せよ」

「……気分しだいかな？」

そう言い残して、立ち去った。

「はぁ……まともそうなヤツでよかったよ」

レイジがそう呟いていたが特に気にしなかった。

EP 4 地球到着／二人目の転生者（後書き）

・F a t eの転生者、衛宮レイジ。F a t eはいろいろな方がよく使われているので採用しました。

レイジは転生者の中では経験をかなり積んでいます。結構強く、能力も物に仕掛けています。

では、今回はこの辺で。

EP5 夜天の王／小さな出会い（前書き）

メリークリスマス！ 皆さんはこの聖夜をどう過ごしていますか？

わたしはひっそりとストック書き溜めてました。

非リア充の私が出来ることってこれ位じゃないですか？（笑）

それはさておき、本編どうぞ

EP5 夜天の王／小さな出会い

僕、園咲来人が転生して数ヶ月。ようやく到着した地球で出くわしたのはフェイト・テストロツサと使い魔アルフ。彼女らと行動を共にしていたFateの能力を持った転生者、衛宮レイジ。

一時共闘し、彼らと別れた僕らは……………

「はむ ライト！ これおいしいよ!？」

「食事中に騒がない」

「は〜い！」

腹が減っては戦は出来ぬ。

先人の言葉にしたがい、近くのレストランで食事を取っていた。

最初は『喫茶翠屋』に行こうか迷ったけど、下手に接触するのはよ

くないと思い、付近のレストランを選んだ。

金銭は神から貰っているけど

(これは……さすがに食べすぎじゃあ……?)

アッという間に皿の山が出来上がっていた。

このタワーが完成するまで数分。他のお客のあんぐりと皿の山を見つめている。

正直、バイキングの方が安く済んだんじゃないかと思う。

そろそろかな。

「フィア、その皿を食べ終わったら出るよ」

「え〜、もうちょっとだけ!」

「ダメ」

「……………ケチ」

そんな言葉はその皿の山を見てから言いなさい。

「お会計は合計で、4万6200円です」

店員の言葉に頬を引き攣らせるしかなかった。

全く、思わぬ出費だった。

僕はちょっと高めの日替わりランチとコーヒーだけだったのに、まさかフィアがあんなに食べるなんて……

今後は注意が必要だ。

それはともかく
閑話休題

今僕らが来ているのは

「（すごい。本がいっぱいだ……！）」

僕のコートのポケットの中で、小人サイズのフィアが興奮した様子で言った。

本がいっぱい、つまり図書館だ。

「（やっぱりこのサイズじゃないとダメ？）」

「（僕としては目立つのは控えたいからね。窮屈だろうけど我慢して）」

「（はい）」

普通に見ればフィアは外人美少女だ。そのせいか町ではいろんな視線を受けていたため、小人サイズでいる様に言ったのだ。

さてと、本が大量にある空間というのはやっぱり落ち着く。次元の
本棚に入ったときはまさに天国だった。

じゃ、読み漁りますか。静かにね。

・ ・ ・ ・ ・

数時間後・・・

「よし、このくらいかな……？」

この世界の地理、歴史、技術等を調べ上げた。

大体は、前世と同じようなものだったから調べ終わるのにはそう時間
間は掛からなかった。

その情報を次元の本棚で検索し、いろいろな事を調べていたら予想以外に時間が掛かってしまった。

まるで自称悪魔の少年のように検索馬鹿になりそうだ。

「すう……………すう……………」

ファイはいつの間にかポケットの中で寝てる。よつぽど退屈だったのだろぅ。それとも興奮疲れ？

ファイを起こさないように立ち上がり読み終わった本を棚に仕舞っている。その時だった。

「んん……………と、届かへん……………」

隣、ちょうど向かいの本棚からそんな声が聞こえてきた。

気になって向かいの棚の方を見ると、そこには車椅子に座った状態で必死に棚の本に手を伸ばしているボブカットの女の子がいた。

あの子は……………八神はやて……………？

意外だ。こんなところで会うなんて。

図書館に通っていたのは原作で知っていたけど、まさかココだった

とは。

さすがにあのまま放置という訳にはいかないので、彼女の傍に行つて手の先にある本をとった。

「この本でいい？」

「へ？」

「あれ、別の本だった？」

「あ、ううん……ありがとう……」

彼女、はやては恥ずかしそうにお礼を言ってきた。

「それで他にとりたい本はある？ 手伝うから」

「あ、ええよ。君にだって予定はあるし……」

「ご心配なく。ちょうど読み終わったところだから」

「あ……それじゃあ、お願いします……」

はやての借りたい本を何冊か取って、はやてには近くのテーブルで待っているように言って、代わりに本を貸りてきた。

「はい。これでよかったかな？」

「あ、ありがとうございます」

何処か緊張した様子ではやては本を受け取る。

「敬語はいいよ、多分同い年だろうし」

僕の場合、外見だけなんだろうけど

「ああ、自己紹介まだやったね。私は八神はやて。ひらがなで『はやて』言つやけど…変やろ？」

「別にそうでもないさ。僕は園咲来人。よろしくね」

お互いに簡単な自己紹介を済ませ、ちょっとした話をした。

内容は主にこういう本が好きなのか？ということ。

お互いのお気に入り小説の良さを語り合ったりしていた。

正直、ここまで話が弾んだのは前世も含めて初めてだと思う。

「そつえば、来人君ってこの辺りに住んどるん？」

「ああ、引っ越してきたばかりなんだ」

一応、嘘ではない。次元と世界を挟むけど引越しの、はず……

「ふん…お父さんとお母さんも大変なんやな」

「……両親はいないよ、僕一人だけ」

「あ……ごめん」

「いいよ、特に寂しいってわけではないしね」

親がいなくて寂しいって年齢じゃないしね……寧ろ、僕にとっては初めからいないようなものだ。

少し憂鬱な気分になっていると、はやてが

「あ！
だっ
たら
うち
来る？」

[illegible]

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

•
•
•
•
•

はい？

理解するのに約10秒。

サラッとトンでもないことを言うね……………

頭の中では『居候』『同居』『同棲』e t c という単語が飛び交っている。

よし、落ち着くんだ僕。普段のように冷静に

「来るって…………そんな簡単に決めていいの？ 両親の承諾も無しで……………」

「平気や。私も一人暮らしやから…………私が家主として許可したる」

一人ってことは、ヴォルケンリッターはまだ目覚めていないってことか。

パラレルワールドだから時期が違うわけではないんだ…………

「ごめん…………少し無神経だった」

「ううん、私も慣れてるから平気や」

そう言ったが、はやての顔は寂しさが浮かんでいた。

（そうか…………言葉では『平気』『慣れてる』とは言ってもやっぱり

り寂しいんだ……)

当然なんだろうはやはまだ歳が二桁にもなっていないんだ。人恋しくてもなんら不思議ではない。

僕のような例が異常だったんだろう。

「それじゃあ、お言葉に甘えて……よろしく願いします」

僕の返事を聞くと、さっきより明るく笑ってくれた。

「はい、よろしく願いされました」

何故だろう、この子はどうしてか放って置けない。今まで経験したことのない初めての感情だ。

八神家・・・

「さて……今日から来人君はここに住むんやから、ここに来る時は『ただいま』って言うんやで」

「わかった……た、ただいま……？」

「はい、お帰り！」

よかった。喜んでくれているみたいだ。

正直、この『ただいま、おかえり』自体をやるのは学生時代以来なんだけど……

「さて、今日は歓迎会も兼ねて私がおいしい料理、ご馳走したるよ！」

はやてが台所へ移動し材料を冷蔵庫や低めの棚から出すと、張り切った様子で調理器具を手を取った。

「いいよ、そんなに張り切らなくても」

「私の料理の腕、信用してへんの？」

いや、料理の腕はかなりの物だったのは覚えているけど、さすがに一人に準備させるのは心苦しい。

「じゃあ手伝うよ、料理なら少しは出来るから」

「ええ！ 来人君はお客さんなんやからゆつくりしててええよ」

「もうお客さんじゃないよ。住まわせてもらう以上、家族みたいなものなんだから」

「（マスター、今の言葉、誤解されますよ）」

あ……よく考えたら、別の意味に聞こえそうな……

「あーご、誤解の無いように言つと、居候させてもらうんだから、手伝つて意味で あれ？ はやて、どうか、した？」

はやてを見ると

泣いていた……

「え、え！？ なにか悪いこと言った？」

「違うんよ……その、家族って言うてくれたのが嬉しくて……」

「そっか……じゃあ改めて、これからよろしくね。はやて」

ハンカチを渡しながら笑って見せると、少し涙ぐんでいるけど、はやても笑ってくれた。

そして、二人で料理を作って、小さな歓迎会が行われたのだった。

EP5 夜天の王／小さな出会い（後書き）

若干どころか結構テンプレでしたが、そこは見逃していただけと助かります。

・フィア、実はビックイーターじゃないですよ。旅が長かった所為です。（激しく弁解）

・はやて登場！ 来人のヒロイン（予定）です。

次回は出来れば今年中にもう一本あげたいなっと思って思っています。

では、失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2796z/>

魔法少女リリカルなのは ～転生者達の軌跡～

2011年12月25日19時52分発行